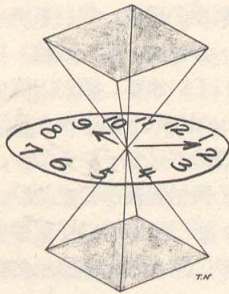


らい 来ぶらり 17

図書館の相互協力について

図書館長 森永 毅彦

(法学部教授・西洋政治思想史)



毎年おびただしい数の書物が出版される。大きな書店に行くと、新刊書が溢れ、何を読めばいいのかわかんばかりである。だが他方、なにか目的をもって探し

てみると、目指す本が見当たらなかつたり、関心のある分野のものが意外に手薄だったりして、がっかりすることもある。単純化して言えば、この「戸惑い」に対して「レファレンス・サービス」を、「がっかり」に対して図書の組織的収集・整理を、対置することが、図書館の仕事なのである。

さて、しかし、いかなる図書館といえども、利用者の求める資料のすべてを備え提供することはできない。複数の図書館がそれぞれ欠けるところを補い合って、利用者の要望にこたえる必要がそこから生まれる。とどめようもない出版物の「洪水」と、利用者のますます多様化し国際化する情報要求とは、この必要を一層大きくする。当館の場合、過去1年間の他館への閲覧や借用の協力依頼は555件、複写依頼は208件、他館からの複写依頼受付は308件。「他館」には外国の図書館が相当数含まれることにも注目したい。「相互協力」はすでに確実に日常化し国際化しているのである。

当館が本年からUtlasに参加することになった(次ページ参照)ことも注目されてよい。これ

は、1970年代に欧米各国でいっせいにスタートすることになった「共同目録作成」システムのひとつであって、これらのオンライン・ネットワークの形成・拡大は、図書館相互協力の歴史に、文字どおり一時期を画しつつある。1昨年開始した「学術情報システム」は、日本の諸大学図書館間に同様のネットワークを形成することを目指すものであり、これへの参加は、今後いかなる大学も避けて通れぬ課題となるであろう。

こうした相互協力の進展は、当然、さまざまな問題をわれわれに投げかける。例えば、それは各図書館にコンピュータ化を「強要」するなど、「規格化」への傾向をはらんでいる。他面、各館の「個性」、つまり、各館は何をもって他に「貢献」するかが、あらためて問われることになる。相互協力はgive and takeの関係であり、自立的な個性なきところ、健全なネットワークは育たないからである。相互協力の進展は、またそのためのサービス体制の確立を必要とするであろうし、さらに、図書館が相互に守るべき規範と価値についての認識とその共有を、一層きびしく求めることになる。

当館1階ロビーの奥に、初代学長安倍能成の胸像が据えられている。彼が新制学習院の理念として「真理と平和」を掲げたこと、また敗戦後の激動期に大きな足跡を残したあの「平和問題談話会」の議長の重責を果たしたことを思うとき、この像はわが大学図書館にとってまことに意義深い象徴であると言わねばならない。

Utlas 導入に向けて

Utlasは、北米の4大オンライン図書館ネットワークのひとつで、そのシステムの柔軟性に特徴がある、とされています。本拠地は、カナダのトロントにあります。現在のところ Utlas は、日本で利用可能な唯一の目録カードのオンライン共同作製システムです。そこで、日本からも国際基督教大学が1982年に加盟したのを皮切りに、立教大学、明治大学、上智大学等が Utlas に参加しています。

学習院大学図書館も今年度から参加して、洋書目録カード作製のスピードアップを目指すこと



早稲田大学坪内博士記念
演劇博物館

校舎の間から突き当たりに見える西欧風建物は、近づくにつれまるで16世紀英国に来てしまったような不思議な気分させてくれます。この博物館は、坪内逍遙の古希と『シェークスピア全集』（全40巻 早稲田大学出版部 大正11-昭和9）翻訳完成の記念として、シェークスピア時代の劇場フォーチュン座を模して設計、昭和3年に建設されたもので、正面には舞台があり、その上方には“Totus Mundus Agit Histrionem—世界はすべて劇場なり—”というラテン語の格言が掲げられています。

中へ足を踏み入れると、静まり返った館内に木の床を踏む音が響き渡り、ちよつと後ろめたさを感じながらも、窓や電燈のアンティークな装飾に目を奪われてしまいます。1階の図書閲覧室は閉架式で、歌舞伎台本やシェークスピア文献から映画、テレビの台本まで幅広い収集に驚きます。陳列室

になりました。Utlas の持つ目録レコード(現在3200万件)のコピーで、今後学習院で作製する洋書目録の約80%はカバー出来る見込みです。

Utlas のデータを修正なしで利用すれば能率的なので、これを機会に学習院の洋書目録を、広くアメリカ、カナダ、日本等で用いられている英米目録規則第2版に合わせる標準化の作業を進めています。コンピュータに目録をのせる準備も必要になって来ました。併せて日常業務も例年どおり消化しなければなりません。

そんな慌ただしさの中、秋には Utlas と結んだオンラインでの目録作製を開始する予定です。3年後には何とか仕事を軌道に乗せたいと願って、洋書係一同がんばっているところです。

(洋書係 広瀬淳子)

は8室あり、それぞれ劇場の変遷、民俗芸能、日本演劇の展望(歌舞伎・浄瑠璃・能・狂言)など、主題別に見やすく分かれています。明治以降の演劇の部屋には、あのオツペケペー節の川上音二郎の使用台本、築地小劇場のポスターやチラシ、手書きの原稿、越路吹雪の舞台衣装までが並び、懐かしさを感じさせます。当日はあいにく整理中だったのですが、このほかに欧米演劇の展示もあるそうです。

この日も博物館をバックに記念写真を撮っている学生がいましたが、校内にあのようなすてきな博物館があるというのは本当に羨ましい限りです。一般に無料公開されているので、一度行ってみたいかがですか? ☎03(203)4141(代) 開館時間: 9:00~16:00 (土曜は14:00) 休館日: 日曜・祝日 (英米文学科3年 斎賀久子)



英国エリザベス朝風の建物が美しい

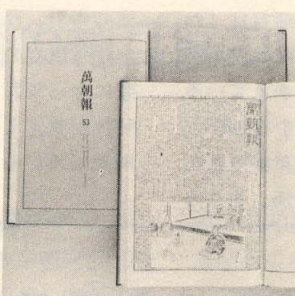
大織冠絵巻 (国文所蔵)。寛文頃写の奈良絵本。料紙には金泥で描いた下絵があり、挿絵は熟練した技工の作。内容は幸若舞の本の大織冠で、藤原鎌足と契った海女が、八大龍王に奪われた宝珠を身を捧げて奪い返すという玉取伝説に取材したもの。絵の面白さにおいては数ある奈良絵本中、屈指のもののひとつ。330万円。

ここ数年、明治期の新聞の復刻出版が盛んです。『朝野新聞』『国民新聞』『平民新聞』などですが、法経図書室、国文科所蔵の『萬朝報』（全53巻 日本図書センター 1983～86）もそのひとつです。

『萬朝報』は明治25年(1892)黒岩涙香によって創刊されました。涙香の名は、その紙上に発表された『噫無情』(レ・ミゼラブル)や『巖窟王』(モンテ・クリスト伯)などの翻案小説の作者として有名ですが、また一方では天性のジャーナリストとして、非凡な才能をいかんなく発揮した人でもありました。

涙香は『萬朝報』発刊の辞の中で「普通一般の多数人民に一日能時勢を知るの便利を得せしめんが為のみ」と述べ、そのために(1)定価を安くすること(2)文章を簡明、平易にすることを約しています。これを固く守って、数年後には発行部数を、東京の新聞中第1位に押し上げることに成功

『萬朝報』と黒岩涙香



しますが、『萬朝報』が短期間のうちに伸長した理由は、なんといってもそのセンセーショナルな紙面編成にあったようです。評論家中島河太郎によれば、「三面記事」「赤新聞」の語は『萬朝報』に由来するそうで、なるほど、たとえば「蓄妾の実例」といった有名人の私生活の暴露や(森鷗外もやりにあがっている)犯罪、社会記事の扇情的な筆法は、まさにスキャンダルジャーナリズムそのものと言えそうです。

しかし涙香の非凡さは、こうした「赤新聞」イメージを温存させながら、イメージ転換に貢献し得る人物として、内村鑑三や幸徳秋水などを入社させ、彼らの鋭い社会批判の論説によって『萬朝報』を言論新聞へと転換させ、最も良心的な新聞のひとつと評価されるまでにしたことにあります。明治時代の文化や社会に興味をもつ人々には、欠かせない資料のひとつといえましょう。

(整理課長 種田昭平)

留 学 雑 感



本学の政治学専攻博士前期課程に入って、もう1年経った。私は上海に生まれ、杭州で育ち、ハルビンにある黒龍江大学日本語科を出た、中国からの留学生だ。いま、斉藤孝教授の下で歴史学の方法を勉強している。

中国での大学生活は全寮制で、適当な運動を除けば、寮、教室、食堂の間に限って動いているので、「三点で一線を成す」と言われていた。そして、学生たちは「現代化」という流れの中に身を置いて、中国というあまりにも重たい宿命を背負いながら、海外への知識欲でいっぱいだった。

大学生気質はというと、中国も日本もそもそも純真で、人一倍負けずに頑張っている点では同じだが、知識に対するとらえ方はちよつと違うような感じがする。たとえば、中国の学生はどうも問題に対する姿勢が原理的で納得のいくところまで問いつづけていく傾向がある。それに対して、日本の学生はむしろ問題に対処的で現実的と思われる。もうひとつ、中国の大学は多くが都心から離れた郊外にあるので、学生たちは構内を中心に生活しているが、こちらは普通都市の一部になっていて、学生は都市生活にとけこんでいる存在だ。

私はいま、都心にありながら、緑の多い学習院の優雅な環境で快適な留学生活を楽しんでいる。

(政治学専攻博士前期課程2年 楊際開)

参考室あれこれ

「数え年をやめて、満年齢で年を数えるようになったのはいつ頃からか調べたいのですが」
どこから調べてよいかわからない時は、まず「百科事典」にあたる。いきなり「数え年」または「満年齢」の項目をひいてもよいが、別冊の「索引」をひいてみた。『平凡社大百科事典』では、「満年齢」の項目なし。「数え年」は11巻 691ページ左と指示。該当ページの見出し項目は「ねんれい 年齢」。そこに「昭和25年以降は満年齢によるべきことが法律によって推奨されている（1950年公布の「年齢のとなえ方に関する法律」）」と書かれている。昭和25年頃から満年齢で数えるようになったとわかり、これで解決。ところ

で、どんな内容の法律か気になり、『岩波六法全書』を見る。巻首にある「法令索引」(50音順)をひいてすぐ見つかった。

「北海道旧土人保護法(明治32年法律第27号)を知りたいのですが、六法に載っていません」

そういう時は、『現行日本法規』か『法令全書』を使う。法令名、公布年、法令番号がわかっているの探すのは容易。公布年月日、法令番号が不明な場合は、前述の法令集の索引や、『日本法令索引』からたどる。『法令全書』は、慶応3年から現在の法令まで収録している。公布年月順になっており、眺めていると、その時代その時代が見えてくるようで、面白い。史学科でも所蔵している。

(参考係 久保田安子)

スペースを求めて

学習院大学には約75万冊の図書がある。そのうち約25万冊を大学図書館が所蔵している。1階開架図書室に約25,000冊があり、2階カウンター横の鉄扉の奥に、6層に分かれて20数万冊が収められている。残りの50万冊は、学内16の学部・学科等の図書室に収納されている。

蔵書数は、全学で毎年3~4万冊の割合で増えており、大学図書館でも6~7,000冊ずつ増加している。

しかし、書庫のスペースには限りがある。新着図書1冊を書架に入れるためにも図書移動を行い、ときには相当の時間を要する。まさに、有限な空間で繰り返される無限のイタチごっこのようだ。

この埃まみれの作業も、図書が利用されることによって初めて意味を持つ。「図書館は利用するためにあることを、くれぐれもお忘れなく」と思いつつ、今日も排架は続くのである……。

(運用係 入村和彦)

お知らせ

○新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。新年度にあたって、これだけは知っておいていただきたい図書館情報を、まずお知らせします。
開館時間—平日8:50~18:30(土曜日16:30)。夏休み、春休み中も開いています。

借りられる冊数・期間—3冊、2週間。長期休暇中は、冊数・期間ともに枠が広がります。

コピーをしたい時—2階カウンター横にコイン式のコピー機があります。セルフ・サービスですの

で、小銭は各自でご用意ください。

リクエスト—読みたい本があったらまずリクエスト。できるだけ購入します。

詳しくは、「来ぶらりガイド 1987年版」をご覧ください。

○「教員著作目録—1985年—」ができました。

本学の専任教員の著作、編集、編さん、翻訳などの業績を、単行本に限って収録しました。ご希望の方は2階カウンターまでどうぞ。

来ぶらり No.17 1987年4月1日発行

発行責任者：森永 毅彦 編集委員：中野里美 北村 誠

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221